国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成23年9月1日発行　第35巻第9号通巻第408号

月刊みんぱく

2011 9月号

特集

〔特別展〕千島・樺太・北海道
アイヌのくらし
ドイツコレクションを中心に

くらしのなかに生きるアイヌの人びとの美意識　佐々木 史郎

ヨーロッパの博物館におけるアイヌ資料　山崎 幸治

石斧で木を伐るがごとく　手塚 薫

〈故地〉を離れた人びと　田村 将人

一〇〇年前の資料と今をつなぐ　齋藤 玲子

エッセイ 千字文

大阪も実は緑の街

坪内 祐三（つぼうち ゆうぞう）

プロフィール
1958年東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒。雑誌編集者を経て文筆業に。主な著書に『靖国』（新潮社）、『一九七二』（文藝春秋）、『酒中日記』（講談社）など。最新刊に『書中日記』（本の雑誌社）、最新文庫に『慶応三年生まれ　七人の旋毛曲り』（新潮文庫）がある。

東京で生まれ育った私は関西とは無縁の生活を送ってきた。

関西と言っても京都にはそれなりに足を運んだ。

修学旅行をはじめとする観光旅行はもちろん、平成のはじめの何年間は日文研（国際日本文化研究センター）の共同研究員だったから、定期に通っていた。

つまり、なじみのない関西とは大阪のことだ。

四〇歳を過ぎるまで大阪を訪れたことは、わずか三回、いや四回だけだった。

しかし実はずっと気になっていた。

特に平成に変って行く頃から、さらに気になっていた。

平成に変って行く頃とは、バブル景気の時代だ。

当時の私は雑誌『東京人』の編集者だったから、バブル景気によって東京の街が大きく変わって行く様子、すなわち古い建物や町並みが消えて行く様を目撃した。

東京に続いて大阪もまた変ろうとしていた、はずだが、その途中でバブルは弾けた。

つまり大阪にはまだ昭和が残っている。という予想のもとに雑誌『関西ぴあ』で「大阪おもい」という連載コラムを二〇〇二年七月から二〇〇七年六月にかけて続けた。

その連載は『まぼろしの大阪』と『大阪おもい』という単行本としてまとめられたが『関西ぴあ』だけでなく『ぴあ』の休刊も決まった今となっては年の流れを改めて感じる。

予想通り大阪には、東京では失なわれていた「街の雰囲気」が残っていたが、意外な一面も知った。

それは大阪が実は緑の街でもあることだ。

大学一年の時、友人と初めて大阪を旅して気づいたのは、東京と比べて大阪に緑が少ないことだった。

環状線のホームの上から眺めるとそれは歴然としていた。

ところが……。

いつの頃からか、大阪行きの楽しみの一つに、淀屋橋港から寝屋川や第二寝屋川も廻る水上バス、アクアライナー乗船が加わった。

この水上バスに乗りながら眺める大阪の風景が素晴らしい。

中之島公園、桜之宮公園、大阪城公園、大阪はこんなにも緑豊かだったのか、と実感させてくれる。東京の隅田川を走る水上バスから見る沿岸風景より素敵だ。

関西在住でまだの人がいたなら、ぜひ。知らずにいるのはもったいないですよ。

月刊 みんぱく
9月号目次

1 エッセイ　千字文
大阪も実は緑の街　坪内 祐三

2 **特集**
特別展　千島・樺太・北海道
アイヌのくらし
ドイツコレクションを中心に
くらしのなかに生きるアイヌの人びとの美意識　佐々木 史郎

3 ヨーロッパの博物館におけるアイヌ資料　山崎 幸治

4 石斧で木を伐るがごとく
――千島アイヌが適応した島嶼世界　手塚 薫

6 〈故地〉を離れた人びと
――樺太アイヌの歴史　田村 将人

8 100年前の資料と今をつなぐ
――北海道アイヌの歴史と現在　齋藤 玲子

10 研究フォーラム
文化資源計画事業
「朝鮮半島の文化」展示関連ビデオテーク
朝倉 敏夫

12 みんぱく Information

14 企画展案内
インド　ポピュラー・アートの世界
三尾 稔

16 散策と思索の径
コロンビアの短い旅
大貫 良夫

18 多文化をささえる人びと
逆説的な存在と活動
カパティラン
鈴木 伸枝

20 歳時世相篇
大震災後の秋祭りの行方
池谷 和信

22 フィールドで考える
贈り物から商品へ
――台湾パイワン族・ルカイ族のアワ食品と小米粽、祈納福
林 麗英

24 次号予告・編集後記

特集

【特別展】千島・樺太・北海道 アイヌのくらし ドイツコレクションを中心に

会期　二〇一一年一〇月六日（木）～一二月六日（火）
場所　国立民族学博物館　特別展示館
※九月二五日（日）まで北海道開拓記念館（札幌）で開催

くらしのなかに生きる アイヌの人びとの美意識

アイヌ文様といえば、渦巻き状の曲線が美しい「モレウ」と、とげのような「アイウシ」が有名だが、それは北海道に特徴的な文様である。サハリンの樺太アイヌでは曲線が組みひものように絡み合う文様などが加わってよりバラエティが増える。千島アイヌでは盆に三角やひし形が連続する幾何学的な模様が彫り込まれる。津軽下北半島から北海道を抜けてサハリン、さらに千島列島からカムチャツカ半島南端に至っていたアイヌモシリのなかにはじつにさまざまな文化をもつアイヌの人びとが暮らしていた。日本で人類学が産声を上げた明治時代に、この広大なアイヌモシリから集められたアイヌ工芸の至宝の数々を紹介しながら、くらしのなかで生き続けてきたアイヌの人びとの美の世界を再現する。

（佐々木史郎　民博 民族文化研究部）

※Ｐ３－９掲載資料（すべて特別展展示資料）については「資料名（アイヌ語／日本語）地域　所蔵館」の順に示す。尚、民博所蔵資料については標本番号を名記する。

タンパクオㇷ゚／煙草入れ
ライプツィヒ民族学博物館 所蔵

イカヨㇷ／矢筒　北海道アイヌ
ライプツィヒ民族学博物館 所蔵

ライプツィヒ民族学博物館（撮影・津田涼子）

ヨーロッパの博物館におけるアイヌ資料

山崎幸治　北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

異国の地にわたる

ヨーロッパの博物館に膨大なアイヌ資料が存在することが、日本で知られるようになったのは今から約三〇年前、一九八〇年代半ばのことである。それはヨーゼフ・クライナー教授を代表とするボン大学調査チームの報告によってもたらされ、すべての日本人研究者を驚かせた。

現在、ロシアに約四五〇〇点、ロシアをのぞくヨーロッパ約二〇カ国に約五七〇〇点（目録上では約六八〇〇点）のアイヌ資料が確認されている。アイヌ資料を所蔵する博物館の多くは、ドイツ語圏の博物館である。ヨーロッパのアイヌ資料は、江戸後期に長崎出島を経由したものをのぞけば、その大半が明治から第一次世界大戦までのあいだに収集されたものである。ヨーロッパのアイヌ資料には、狩猟や漁撈などの生業関係の資料が比較的多く、一方で漆器や農耕具が極端に少ないことが特徴となっている。収集活動は、日本に居住していた御雇外国人、宣教師、日本人研究者などの協力をえておこなわれた。

アイヌの起源をめぐって

ところで、なぜ、これほど多くのアイヌ資料がヨーロッパに存在しているのであろうか？そこには、当時のヨーロッパ人が抱いていた特異なアイヌ観が思想的な背景としてあった。なかでも一八世紀末から一九世紀初頭にかけてルソーの哲学の影響をうけたクルーゼンシュテルンをはじめとする航海者たちが、戦争に明け暮れていた当時のヨーロッパの状況を憂い、自然と一体となり平和に暮らす模範的な人びと、いわゆる「高貴なる野蛮人」としてアイヌを紹介したことは、ヨーロッパ人のアイヌ観に大きな影響を与えた。明治期に入ると、アイヌは白人であるとする「アイヌ白人説」が形質人類学の分野において論争となり、アイヌへの関心を助長した。そこではアイヌの墓地が荒らされるなど国際問題に発展することもあった。

ヨーロッパのアイヌ資料からは、かつてのアイヌの暮らしだけではなく、ヨーロッパの思想史の変遷も見えてくるのである。

キテ／銛先　北海道アイヌ
ライプツィヒ民族学博物館 所蔵

石斧で木を伐るがごとく

――千島アイヌが適応した島嶼世界

手塚薫　北海学園大学教授

オンネコタン島ネモ湾。写真中央にリング状の遺構が数基見える。学術雑誌『サイエンス』（Vol.284 Issue 5414）にもとり上げられ、アイヌ文化期のものとされて話題となった。河川沿いに流木が多数打ち上げられている。

「ウキビ」／杓子　千島アイヌ
K0002388

テンキ／籠　千島アイヌ
ライプツィヒ民族学博物館 所蔵

シュムシュ島パイコヴォを見下ろす丘での国際調査団の発掘風景。多数の石器や骨角器が出土した。

始まりは一束の矢から

一八九九年、恩師坪井正五郎の命を受けて千島列島の現地調査を実施することになった当時東京帝国大学助手の鳥居龍蔵は、武蔵艦に乗船し千島列島各地を巡っている。調査のきっかけは、開拓と国防を目的に北千島に入植していた郡司成忠ら報效義会のメンバーがシュムシュ島で発見した竪穴住居の屋根裏に骨鏃をもつ矢が一束差し込まれていたことにある。郡司は、坪井が日本列島の石器時代人はコロボックルであり、後にアイヌに駆逐されたという自説を展開しているのを知っており、事の真偽を確かめてほしいと調査をもちかけたのだが、坪井は多忙のためその調査を鳥居に委ねた。

「ニポン」／盆　千島アイヌ
K0002368
三角やそれを向かい合わせにしたひし形が連続する、幾何学的な文様が彫り込まれている。北海道や樺太の緩やかな曲線とは対照的だ。

チセ、チェ／家屋（模型）　千島アイヌ
K0002708
左が出入口、右が中心柱のない主室

籠を作る2人の女、竪穴住居の模型を作る男。エトピリカ（撮影／解説　鳥居龍蔵　「考古学民族学研究・千島アイヌ」（仏文）より）

鳥居はシュムシュ島に着くと直ちに件の土中に埋もれていた竪穴の調査に着手した。そして、草屋根も残存し、あまり古い時期のものではなく住居の構造の特徴からアイヌのものであると結論づけた。ただし、北海道アイヌの平地住居と異なり、地面を掘りこんで柱を建て屋根を組み、入口のみを外部に開き、その他は上から土をかぶせたものであった。

地面を掘るのに金属製掘具を使用せず、骨や石を使用した場合の労苦は並大抵のものではないだろう。千島アイヌのあいだにはつらい作業を苦労して成し遂げたときの喩えに「石斧で木を伐るのにとても苦労した」という慣用句があり、鳥居が採録している。二〇〇四年に発表された工藤雄一郎らによる実験考古学のデータからは、直径三〇センチメートルの樹木を伐採する場合、石斧と鉄斧では伐採に要したストローク数でじつに三・九倍の開きがあったという。いかにも実感がこもっている表現といえよう。

鳥居の助手として色丹島から同行した六〇歳代の千島アイヌのグリゴリもシュムシュ島の竪穴は「我らの住居した跡」と証言し、さらに屋根裏から出土した骨鏃と同一のものを今もなお製作していると述べている。グリゴリによれば、海岸に打ち寄せられた鯨の骨から同一の骨鏃を作っていたことも明らかとなる。石鏃のみならず、アイヌ語でpoina(石)mukar(斧)とよぶ道具をも使っていた。文字どおり石斧のことである。また鳥居は、千島では最近まで粘土に草を混ぜて焼き固めた内耳鍋を使用していた事実を千島アイヌのステファニ媼から教わり注目している。

島で暮らす工夫

筆者は二〇〇〇年以来、米・露・日の研究者らと共同で全米科学財団の支援を受けながら千島各地をフィールドワークしている。鳥居が上陸したシュムシュ島やパラムシル島も訪れた。調査時には島でテント暮らしをする場合が多く、飲料水と薪の確保は欠かせない。立木がないので、手ごろなサイズの流木を集めそれで暖をとり炊事もこなす。

植物地理学上著名な「宮部線」は択捉島とウルップ島のあいだに引かれ、北海道を含む亜温帯区系域の汎針広混交林帯とアリューシャン列島やカムチャツカ半島を含む亜寒帯植生の境界となっている。すなわち、このラインより北東方向には幹の太い高木は分布しない。したがって千島では流木、寄り鯨、難破船の部材の流用も慣例となっていた。

風土にみあった竪穴住居

千島アイヌは流木や海獣骨など入手できる素材を巧みに利用して竪穴住居を組み立てる。世界の民族誌データから竪穴住居の体系的分類を実施し、その成果を一九八一年に公表した渡辺仁によって、千島アイヌの竪穴住居は「土被覆型壁出入口式非中心柱型単式出入口方形」型に分類されている。竪穴全体を土で覆い、出入口は壁付け、主室に中心柱がなく、出入口がひとつで、主室が方形という意である。千島で平地住居に移行できなかったのは、断熱効率の悪い地表式住居で必要とされる十分な燃料の確保が難しく、一方で竪穴住居は限られた材料と構造で大きな防寒効果がえられるからであった。鳥居は千島アイヌに住居模型を製作させるなど、その構造に並々ならぬ関心を寄せていた。

当時としては画期的な、千島アイヌの民俗に精通する人物を伴っての実証的な現地調査の結果、竪穴や土器使用の事実を自らの目と耳で確認した鳥居は、次第にそれらの痕跡を残した人びとはアイヌであるとの判断に傾いていく。それは恩師のコロボックル説とは相いれないものであった。

〈故地〉を離れた人びと

――樺太アイヌの歴史

田村将人（たむらまさと）　北海道開拓記念館学芸員

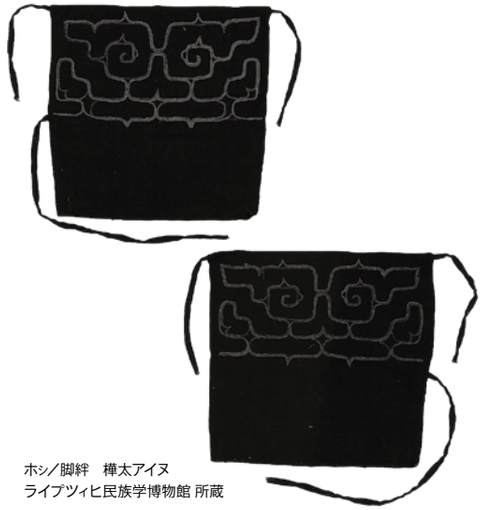
樺太アイヌとは、北海道の北に位置するサハリンの北緯五〇度以南に住んでいた人びとのことである。あえて過去形にしたのは、一九四五年八月を境に人口約一二〇〇人のうちほとんどの人が、和人と同様に「引揚船」に乗って北海道に渡ったからだ。日本領樺太が消滅し、ソビエト領サハリンへと島名が変わったが、サハリンアイヌとよぶよりは樺太アイヌとよんだほうがしっくりくるだろう（以下、地理的な島名はサハリンに統一する）。

翻弄される

一九世紀の半ばまで、樺太アイヌは清朝にクロテンの毛皮を貢納し、一方で江戸幕府や蝦夷地を領地とした松前藩の支配下にも置かれ、両国のあいだでとりひきされたサンタン交易の担い手でもあった。露清国境画定によって、ロシアが一八五〇年代以降本格的にサハリンの経営に乗り出した結果、「日露雑居」状態となりトラブルが絶えなかった。

一八七五年、サハリン全島をロシア領とする樺太千島交換条約によって国境問題はいったん決着し、その附録によって先住民の去就は三年以内に決定されることになっていた。しかし、サハリン南部に住む八四一人は開拓使に急かされて対岸の宗谷（現稚内市）に移住し、翌年札幌近郊の対雁（ついしかり）（現江別市）に強制移住させられた。民博所蔵資料にも、対雁で収集された樺太アイヌに特徴的な丸い椀がある。この対雁ではコレラのため三五〇人余りが亡くなり、生存者は日露戦争後までにはサハリンへ帰還した。

エピリケヘ／小刀　樺太アイヌ
K0002564
組みひものように絡み合う文様は、樺太の特徴である。木彫も刺しゅうの文様も、ともに北海道よりも複雑で繊細な印象をつくりだしている。



ホシ／脚絆　樺太アイヌ
ライプツィヒ民族学博物館 所蔵

歴史がまねいた学者たち

ロシア領サハリンには、約一〇〇〇人の樺太アイヌが移住せずにそのまま住んでいた。チェーホフ『サハリン島』に象徴されるように、サハリンはまさに島ごと監獄と化していた。刑期を終えて農民として残ったロシア人など、先住民が接したのはそういう経歴のもち主だった。その一人、ポーランド人のブロニスワフ・ピウスツキは政治犯としてサハリンに流刑され、刑期を終えた後、アイヌのみならずサハリン中北部に住む先住民（ニヴフやウイルタ）の言語や文化の研究を開始した。一九〇三年には民族学者シェロシェフスキとともに北海道でも資料を収集した。彼らが収集した物質資料はロシアやドイツの複数の博物館に収められており、今回その一部が展示される。

一九〇五年日露戦争の終盤に日本軍がサハリン全島を占領し、ポーツマス条約によって北緯五〇度以南が日本領になった。ピウスツキはこの年サハリンを離れた。一方、日本はあらたな植民地を獲得したことになり、坪井正五郎や石田収蔵（いしだしゅうぞう）、鳥居龍蔵といった人類学者や、言語学者である金田一京助（きんだいちきょうすけ）などの調査が相次いだ。

日本領樺太を統治した樺太庁は一九〇八～二一年にかけて樺太アイヌを約一〇カ所に集住させた。そこでは画一的な和風の家屋や学校が用意されたが、「土人指導員」のほか和人は基本的に排除された。「北海道旧土人保護法」（一八九九年施行）は植民地・樺太には適用されず、樺太庁は「土人漁場」というニシン・マス・サケの定置漁業権をもとに先住民政策の費用を捻出するシステムを作った。このように、樺太アイヌには近世から近代に至るまで、北海道アイヌとは異なった歴史があることをわかっていただけるだろう。展示場では、一九〇二～〇五年ころ（ロシア領時代）に撮影されたピウスツキの写真と、一九〇七～一七年ころ（日本領時代）に撮影された石田収蔵の写真を見ることもできる。

ヘトムイェ／冠（上）
ホホチリ／額飾り（下）
樺太アイヌ
北海道開拓記念館 所蔵

右から二人目はホホチリを前髪に結びつけている。左の男児二人は前頭部を剃って後頭部の髪をのばし、中央の女児は冠状のヘアバンドをしている。（撮影・石田収蔵、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 所蔵）

思いをめぐらす

最後に、民博では北海道開拓記念館の資料が一点展示される。樺太アイヌの男児が前髪に結びつけていて、自分で獲物を捕ったときに切り落とされたといわれるホホチリだ。ピウスツキや石田の写真に収められているが、国内では唯一の資料となる（ドイツに一点ある）。男児用のホホチリが女性用のヘアバンド（冠）から垂れ下がっているというのも初めての例。この資料は最近樺太アイヌの方から寄贈されたものである（寄贈者を交えた座談会を九月一八日に北海道開拓記念館で開催予定）。

毎年六月には、先にふれた対雁の地で、樺太アイヌが主催する慰霊祭が開かれている。約一〇〇年前の資料を通じて、樺太アイヌの歴史に思いをめぐらせていただきたい。

シカリンパハ／椀（対雁）　樺太アイヌ
K0002636

一〇〇年前の資料と今をつなぐ

――北海道アイヌの暮

齋藤玲子（さいとうれいこ）　民博 民族文化研究部

歴史を知る

二〇〇八年六月、国会で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択された。それを受けて「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」の報告書が翌年に出されたが、「今にいたる歴史的経緯」に半分近い頁が割かれている。「今後のアイヌ政策を考えるにあたり、正面から歴史に向き合うことが不可欠である」からという。歴史を知ることなしに、将来は考えられない。

北海道の先史時代は、縄文文化期以降が本州以南と大きく異なる。弥生文化にあたる時期にも水稲耕作はおこなわず、狩猟・漁撈・採集を基盤とする生業であったため、この文化は続縄文文化とよばれる。その後、七世紀ころに本州の影響を受けて擦文（さつもん）文化がうまれる。北海道北部から東部にかけての沿岸部では、五～一〇世紀ころまでサハリンから南下したオホーツク文化もひろがり、道東ではやがて擦文文化と融合したトビニタイ文化に変容する。一二世紀ころ、竪穴式住居や土器が使用されなくなるのをもって擦文文化（トビニタイ文化）が終わり、アイヌ文化期が始まる、とするのが一般的である。このとき人の集団が入れ替わったのではなく、擦文文化を母胎とし、本州の影響を強く受けながら成立したものとされている。ただし、このころの考古学・文献史学の資料はともに充分ではなく、本州北部から北海道、千島や樺太と広範にわたるアイヌ文化圏の、どこでどのように変化が起き、どう伝播したのかなど、まだ解明されていない点が多い。

イクパスイ／棒酒箸　北海道アイヌ
K0001818

「イナヲを製する図」（『蝦夷生計図説』より　東京大学総合研究博物館 所蔵）
神に祈る際にヤナギなどを薄く削ってつくるもので、人間のことばを伝え、捧げものとなるなど重要な役割を果たす。

イナウ／削り掛け　北海道アイヌ
K0002275

交易の民

アイヌ文化の成立と発展に、交易が大きくかかわっていたことは確からしい。日本史の中世にあたる時期、交易によって力をのばした東北地方の豪族たちは北海道南部に館を築くようになり、一五世紀半ばには一二の館が割拠していた。このころになると文献史料が増え、蝦夷からの交易品は多種の毛皮やワシ羽、魚介類といった動物資源をはじめ、アムール流域から樺太経由で入ってくるガラス玉や青銅製品、絹織物などであったことがわかる。一方、本州からアイヌの人びとにもたらされたものは、鉄製品や漆器、布などで、こうした移入品は次第に生活に不可欠なものとなり、狩猟・漁撈は自給自足にとどまらず、交易のための商品生産活動としての比重が増していったと考えられている。

中世末まで、和人とアイヌの関係は交易相手として対等な立場にあったが、松前藩が蝦夷地での交易権をにぎり、収益をあげるために各地に漁場を開き、それを商人に請け負わせるようになると、江戸時代の後半にはアイヌは労働者として酷使されるようになっていった。さらに、明治期の開拓により移住者が激増すると、アイヌは土地を奪われ、生業活動を制限され生活が困窮するばかりか、和風化をも強制され、文化の衰退を余儀なくされた。

展示資料が語るアイヌの姿

まもなく始まる特別展では、明治期の急激な変化のなかで収集された生活用具が大半を占める。それらは、われわれが「伝統的なアイヌ文化」として認識する江戸時代の文書や絵画などに記録された物質文化を、まだ残している。それとともに、最初から研究や博覧会のための「資料」とする目的で収集された船や家屋の模型など、アイヌの人びとにあらたに作らせた物も含まれている。当時、収集にあたった研究者らの記録からは、生活が大きく変わっていくなかで、使わなくなった道具類がたやすく購入できたことや、一方で漆器やイクパスイ（酒を捧げるへら状の道具）などの父祖から伝わる宝物や儀礼具を手放すことに躊躇（ちゅうちょ）するアイヌの姿も読みとれる。

近年の研究は、アイヌのみの歴史を描くのではなく、和人をはじめ隣接する民族との相互関係の歴史をとらえ直し、アイヌの主体的な動きも明らかにしようとしている。そして、今を生きるアイヌ民族の人びとは、伝統文化に学びつつ、現代に合ったアイヌ文化のあり方を模索している。使い込まれた器物を前に、一〇〇年前の人びとの姿を思い浮かべてみる。研究のために明治～昭和初期にアイヌの地で収集され、ドイツや東京にもち帰られた古い資料が、どのような経緯で今ここにあるのか、展示では、そこに携わった人びとの動きをも伝えることができればと考えている。

イタオマチㇷ゚／板綴舟（模型）　北海道アイヌ
K0002212

コンチ／頭巾　北海道アイヌ
K0002272
中央の渦巻きはアイヌ語でモレウ（少し曲がる）といい、その周りをめぐるとがった括弧文はアイウシ（とげのある）とよばれる。こうした基本パターンの組み合わせで、美しい文様が生みだされる。

タマサイ／首飾り　北海道アイヌ
K0001849

研究フォーラム

文化資源計画事業

「朝鮮半島の文化」展示関連ビデオテーク

朝倉 敏夫（あさくら としお）
民博 文化資源研究センター

本館は韓国の国立民俗博物館（以下、ソウル民博）と2007年7月に国際学術協定を結び、いくつかの事業を共同でおこなっている。そのひとつ「『朝鮮半島の文化』に関する映像資料収集の新たなシステムの構築と収集事業」（3年計画）の初年度の成果が、この9月からビデオテーク番組で来館者の皆様にご利用いただく形で公開される。

映像制作ワークショップ

本年七月九日、一〇日、ソウル民博の会議室で、本館「朝鮮半島の文化」展示に関する映像制作のためのワークショップをおこなった。日本側は映像人類学の第一人者である本館の大森康宏名誉教授、通訳として総合研究大学院大学院生の金セッピョルさん、わたしの三人。韓国側は、ソウル大学で映像人類学を教える李文雄名誉教授、ソウル民博から千鎭基館長、本事業担当の鄭明燮民俗研究課長と張庠教さんのほか学芸員十余人。そして今回の制作チーム三チームの五人。全員で二〇数人の出席があった。

制作チームは、六月初めにソウル民博から、韓国の民俗学、社会学、歴史学、国文学、映像専攻学科関連大学（大学院を含む）に在学中であり、映像制作と編集が可能な学生を対象に募集した。江原大の文化人類学科、延世大の文化人類学科・社会学科三チーム、全北大の考古文化人類学科二チーム、安東大の民俗学科、韓国伝統文化学校の文化財管理学科、東国大の映画映像学科二チーム、西江大の映像大学院の計一一チームが応募した。彼らの提出したそれぞれの制作チームを紹介する資料と五分から二〇分程度の映像作品を、シナリオ完成度、制作能力、チームの専門性、発展可能性の四つの項目に基づき審査した。審査委員は、米国テンプル大学の映像人類学博士であるソウル民博の沈宰奭さん、外部委員として徳成女子大文化人類学科の李應哲教授、韓国学中央研究院民俗学専攻の金一権教授である。今回は映像コンテンツより映像美と画面構成力に比重をおいて審査し、西江大、全北大、東国大の三チームを選抜したという。

一日目は、鄭課長の司会で午後一時から始まり、わたしの主旨説明につづいて、西江大チームが「伝統音楽を楽しむ人たち」、全北大が「群山の日本式家屋」、東国大が「トッポッキ（餅炒め）」を主題とする制作計画を発表し、それに対して質疑とコメントがだされた。その後、三チームの主題について、出席者全員による意見交換がおこなわれ、六時から懇親会があった。

二日目は、朝九時三〇分から大森先生の総合研究大学院大学でおこなったワークショップの事例をとおして、具体的な映像人類学の講演があった。制作チームからは、そうしたワークショップを韓国でも開催してほしいという希望がだされた。その後、三チームが制作する映像の主題および具体的なコンテンツについて、本館とソウル民博からの助言に基づいて、今後の制作にあたっては沈さんがサポートしてくれることになった。昼食になっても、制作チームは大森先生を囲み、質問に終始した。

新しい制作システムの構築

本事業のねらいは、本館のビデオテークの映像資料の開発・収集に新しい制作システムを構築することにある。本館の展示場は、現地の人たちが自分たちの文化をどのように表象したいのか、その想いを反映できるようなフォーラムの場となっている。映像資料でも、そうした現地の声を反映できるものにしたいというのが初めの考えであった。そして、韓国人の視点から韓国人の生活像を日本人に紹介する映像作品を制作してもらい、それをビデオテーク番組にする計画をたてた。

これまでのビデオテーク番組は、本館のスタッフがプロジェクトを申請し、プロのカメラマンとともに現地に赴き撮影した映像を編集するというものであった。今回、現地の人に撮影を任せることで、これまでのビデオテーク制作のいくつかの限界を越えることにもなった。まず、長期間にわたっての撮影が可能となる。また、ある出来事が起こったときに、すぐに機動性をもって撮影ができ、同じテーマであっても、地域を変えたり、時期を変えたり、立体的に映像を構成することができるようになる。

ビデオテーク『キムジャンをする日』の一場面

昨年度の反省と評価

この映像制作ワークショップは、今年度が二回目である。昨年度は六チームから応募があり、全北大学、東国大学、延世大学の三チームが選抜された。昨年度のチームには、初年度のため事前打ち合わせに時間がかかり、今年度同様のワークショップが九月になり、一二月末の作品提出まで実際の撮影期間が三カ月しか与えられなかった。

彼らには映像制作後、一月に本館に来てもらい、試写会と評価のワークショップをおこなった。これは、自分たちの制作した映像作品について大森先生をはじめ本館のビデオテークに携わる専門家から集中的な指導助言を受けることになり、彼らにとって大きな財産になったようである。さらに韓国には大学に映像人類学に関心をもって活動するサークルは多くあるが、この事業により、彼らのネットワークが形成されるという副次的な効果もあった。こうしたネットワークがさらに広がり、応募者が増加すれば、将来はコンテスト方式によりビデオテーク作品を公募するということも考えられよう。

新番組登場

昨年度制作されたのは、以下の三作品である。ひとつは全州市にある在来市場を長期間にわたり撮影し、それらを市場の一日として編集したもので、韓国人にとっての在来市場の位置づけがよくわかり、一度行ってみたくなる映像である。ふたつは、韓国の冬の歳時記キムジャン（越冬用キムチ作り）を都市と田舎のふたつの家庭において描いたもので、キムチ作りの全過程がよくわかり、キムチを作ってみたくなる。三つは、韓国の名門大学のひとつ延世大学の総学生会長の選挙を記録したもので、今日のキャンパス・ライフの一面とともに、韓国社会の選挙方法のおもしろさを語ってくれる。

それぞれ日本語・韓国語の二種が用意され、計六本が九月から本館のビデオテークの新番組としてお披露目される（一二頁参照）。ぜひ、お楽しみいただきたい。

特別展

**「千島・樺太・北海道 アイヌのくらし
――ドイツコレクションを中心に」**

本特別展では、ドイツのライプツィヒとドレスデンの民族学博物館に収蔵されているアイヌの工芸品の数々と、本館に収蔵されている同時代に東京大学で収集された資料とを比較対照するように展示します。

会期　10月6日（木）～12月6日（火）
会場　特別展示館

■関連イベント

◆研究公演

「アイヌ音楽ライブ　トンコリ×ウポポ」

樺太アイヌの弦楽器トンコリを復活させ、その魅力をひろめたミュージシャンのOKI（オキ）と、輪唱歌ウポポを再現する女性ユニットのマレウレウによる、現代に息づくアイヌ音楽をお楽しみください。

日時　10月16日（日）　14時～15時30分
（開場13時30分）
場所　講堂（定員450名）
※参加無料、要申込
申込締切　9月29日（木）必着

申込方法
往復はがきに住所・氏名（返信用おもてにも・年齢・電話番号・参加人数（本人を含め4人まで）、と研究公演タイトル・実施日を書いて広報企画室企画連携係までお申し込みください。応募者多数の場合は抽選となります。
◇「国立民族学博物館友の会」維持会員および正会員の方は優遇枠がありますので、会員番号もご記入ください。

◆みんぱく映画会

「TOKYOアイヌ」

日時　10月9日（日）　13時30分～16時
（開場13時）
場所　講堂（先着450名）
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

以上、研究公演と映画会のお問い合わせ先
広報企画室　企画連携係
電話　06・6878・8210
※この他にも様々なイベントを予定しています。お楽しみに！

企画展

**「インド　ポピュラー・アートの世界
――近代西欧との出会いと展開」**

インドの庶民の間で親しまれてきた風景画や宗教画、広告など約140点のコレクションを展示し、インドの人々の美意識や宗教観の変遷をたどります。

会期　9月22日（木）～11月29日（火）
会場　本館展示場内

公開講演会

「ワタシのIBASHO――新しい〈ふるさと〉像をもとめて」

移民・移住や産業化がますます進み、古典的な「ふるさと」像からの脱却がもとめられる昨今、「ふるさと」像の再構成や、それを伝承するための実践について考えます。また、「ふるさと」像に代わる観念をいかに創出できるのか、人類の未来の可能性について議論します。

日時　11月4日（金）　18時～20時20分
（開場17時）
会場　日経ホール（東京都千代田区大手町1―3―7日経ビル3階）
定員　600名
※手話通訳あり
※参加無料、要申込

参加申込方法
「11月4日公開講演会参加」と明記の上、氏名・郵便番号・住所・電話番号・今後の講演会などの案内送付希望の有無を書いて、ハガキ、FAX、メールにて左記「研究協力係」までお申し込みください。
FAX　06・6878・8479
E-mail :koenkai@idc.minpaku.ac.jp

お問い合わせ先
研究協力課　研究協力係
電話　06・6878・8209
※詳細および申し込みについては、みんぱくホームページをご覧ください。

東日本大震災被災地に対する本館の取り組みについてはホームページをご覧ください。

毎日新聞夕刊連載「旅・いろいろ地球人」
みんぱくの研究者のエッセイが毎週木曜日に掲載されています。

＊お問い合わせの受付時間は平日9時から17時（土・日・祝を除く）です。

刊行物紹介

■『民博通信』2011　No.132
評論・展望
「環流」する「インド文化」
――グローバル化する地域文化への視点
三尾稔

■『民博通信』2011　No.133
評論・展望
新しい人文学の創成を目指して
――民博の改組と人間文化研究機構のこれから
長野泰彦

ビデオテーク新番組（9月公開予定）

番号	タイトル（監修者）	番組種別	地域	時間
2800	キムジャンをする日：韓国人はキムチを漬ける	短編（日本語字幕）	朝鮮半島	18分
8004	김장하는 날：한국인은 김치를 담근다	短編（韓国語字幕）	朝鮮半島	18分
2801	南部市場の一日：韓国 全羅北道全州市の在来市場	短編（日本語字幕）	朝鮮半島	16分
8005	전라북도 전주 남부시장의 하루	短編（韓国語字幕）	朝鮮半島	16分
2802	会長になるなら：延世大学校 第48代総学生会選挙の話	短編（日本語字幕）	朝鮮半島	18分
8006	회장이 되려면？：연세대학교 제48대 총학생회 선거 이야기	短編（韓国語字幕）	朝鮮半島	18分
1699	海を渡った和太鼓　（寺田吉孝）	短編	アメリカ	15分
3699	Taiko in North America　(TERADA Yoshitaka)	短編（英語）	アメリカ	15分
7217	Angry Drummers : A Taiko Group from Osaka, Japan　(TERADA Yoshitaka)	長編（英語字幕）	日本／近畿	85分
2803	ポン教のツキを呼ぶ儀礼：ヤングー　（長野泰彦）	短編（日本語字幕）	南アジア・中国地域	14分
6044	インドネシア・スンバ島の家　（佐藤浩司）	マルチメディア	東南アジア	-
7182	ベリーダンス　（西尾哲夫）	長編	西アジア	54分

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。）

第400回　9月17日（土）
【第400回記念みんぱくゼミナール】
グローバリゼーションと移民
講師　伊豫谷登士翁（一橋大学 特任教授）
須藤健一（国立民族学博物館長）

情報交換するアジアからの女性移民（香港）

戦後の移民は2億人といわれます。異文化のなかで心地よい居場所をさがし、新たな人間関係をきずいて生活する移民の前途は多難です。人は何を求め、どんな希望を胸に国境を越えるのか。移動があたりまえの今日、移民について考えてみましょう。

第401回　10月15日（土）
【特別展関連】
物にみるアイヌ文化の地域性――周辺民族との比較
講師　齋藤玲子（国立民族学博物館 助教）

間宮林蔵『北蝦夷図説』市立函館中央図書館所蔵

千島・樺太・北海道と海に囲まれた広範な土地にくらしてきたアイヌの文化は、一様ではなく、地域的な特徴があります。そのわかりやすい例が、衣食住などに関する生活用具で、素材や形には隣接する民族の影響が見受けられます。開催中の特別展で注目していただきたい資料についてもお話しします。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）
第400回　10月8日（土）14時～15時
※開催日にご注意ください
【特別展「千島・樺太・北海道 アイヌのくらし」関連】
日本の人類学の黎明とアイヌ文化
講師　佐々木史郎（国立民族学博物館 教授）
日本の人類学・民族学は今から120年ほど前に産声をあげましたが、当時の研究者はどのようなことを考え、どのような記録を残したのでしょうか。それを知る手がかりともなるのがアイヌ文化研究です。当時収集された資料をご覧いただきながらお話しします。
※講演会終了後、特別展見学会があります。

東京講演会
会場　江戸東京博物館 学習室
定員　70名（要申込）
第99回　9月24日（土）14時～15時
【特別展「千島・樺太・北海道 アイヌのくらし」関連】
アイヌ文化への憧憬
講師　佐々木史郎（国立民族学博物館 教授）
19～20世紀にかけてドイツと日本の人類学者はアイヌ文化に強い関心を示し、積極的に資料を収集しました。人間の理想郷を求めるドイツとコロボックル論争に見られるように自らのルーツをさぐる日本。それぞれの思惑は収集資料からもうかがえます。時代背景もよみときながらお話します。
※会場にアイヌ文化の資料（衣類など）を持参します。

第100回　10月29日（土）14時～15時
本物のインドらしさ
――南インド、タミル人のアイデンティティ
講師　杉本良男（国立民族学博物館 教授）
南インドの人びとは、生粋のインド文化はタミル文化、ドラヴィダ文化にこそ継承されていると考えています。その主張はどのようなもので、どのように形成されていったのでしょうか。インドの歴史もよみときながらお話します。

アイヌ文様の布小物

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

アイヌには、いまなお伝えられている独特の文化があります。そのひとつが民族衣装や日常用具などに使用される文様です。多くは、モレウ（渦巻文様）とアイウシ（括弧文様）というふたつの基本形を組み合わせ、連続した線で結んでつくられています。この文様は、川の流れで生じる渦、北国ながらの厳しい風、木に絡まるツタなど、自然の中にカミを見いだしたアイヌならではのものといえるでしょう。服飾に用いられるこれらの文様は、刺繍で入れられたり、別の布を張り合わせた切伏や布を切り抜く切抜といった方法で表現されています。
この文様が施された刺繍のバッグと、切伏のポシェット、リュックをご紹介します。

刺しゅうバッグ	8,000円～
切伏ポシェット	7,500円～
切伏リュック	8,525円～　（すべて税込み）

企画展

「インド ポピュラー・アートの世界」

三尾 稔（みお みのる）
民博 研究戦略センター

ポスター絵の源流

インドの街角では「ポスター屋」をよく見かける。道端に商品を広げることもあれば、屋台売りもあるし、店を構えていることもある。映画俳優や女優のポートレートが定番商品だが、それと人気を二分するのがさまざまな神々の姿を印刷したものだ。こちらは家に飾るというより、祭壇に置き儀式の対象として用いることの方が多い。近年では3D化した神話画像も人気である。一枚数十円程度で、結構売れているポスターの二大テーマである「映画」や「神々の肖像」だが、その源流は一九世紀の植民地時代におけるインドの大衆文化と西洋の技術や美術表現との出会いにさかのぼることができる。

ポピュラー・アートの成立と発展

植民地期のインドには鉄道や電信など近代西欧の先進技術が次々に導入された。芸術分野では、写真が一八四〇年代に早くも到来し、対象を肉感的に表現する技術として上流階層を中心に人気を集めた。遠近法など西欧的な絵画技法を教える学校がインドに次々にできるのも、ちょうどこのころである。インドを主題とした西欧人による写真や絵画ではエキゾチックにうつる風俗や田園風景、先住民族の姿、官能的な女性などが好まれたが、インドの中上流階層もその趣味に同化し、そうした作品の消費者となってゆく。舞台装置を背景とした演劇も近代西欧から輸入された。ここでも写実的な背景画が書割りとなったが、演出面では、見せ場で主人公の苦悩や愛をたっぷりと大仰な身振りで演ずるインドの伝統的な手法が好まれたようである。こういう演出方法や田園をエキゾチックな舞台として挿入する手法などは後にインド映画の主要な特徴となってゆく。

クリシュナ神とその愛人ラーダーが写真を撮影してもらうかのようにこちらを見てほほ笑むポスター。1930年代のもの（ジョティンドラ・ジャイン氏およびジュッタ・ジャイン氏共同所蔵）

神々もまた近代的技法で描かれるようになる。写実的な構図のもとで人間的な衣装をまとって神々が表現されたり、肖像写真のごとく神々がこちらを見つめるように描かれたりするのは一九世紀後半以降のことだった。ヒンドゥー教では神と信者が目を見交わすことが何より重要とされたため、写真的な神々の肖像の登場は幅広い層に受け入れられた。

こうした神々の図像や、婦人画、演劇（のちに映画）の情景画などは、これも西欧渡来の石版印刷技術によって安価な複製が可能になり、大量に市場に出回るに至る。またこれらの複製画は絵葉書、商品ラベル、カレンダー、マッチやたばこの包装デザインなどにもなり、庶民にも親しまれるようになってゆく。

「インド ポピュラー・アートの世界」展

この秋の民博の企画展「インドポピュラー・アートの世界」では、一九世紀後半の成立期から二〇世紀前半の発展期まで約一三〇点の作品を紹介する。作品はすべてインドの美術史家ジョティンドラ・ジャイン氏のコレクションで、インドや西欧でも巡回展示され好評を博している。今回の展示でも、インドにおけるポピュラー・アートの成立や展開のありさまがわかるよう、順を追いジャンルをわけてユニークなアートの世界を紹介する。

日本製のヒンドゥー神像の意味

一九世紀後半から二〇世紀前半は、欧米列強の世界分割や資本主義的生産様式が著しく進んだ時期でもある。植民地支配に伴う人の移動や資本や商品の流通によって世界は緊密に関係づけられていった。今回の展示作品にはこれを反映するものも含まれる。例えば、インドで流通したマッチの絵は日本でも制作された。明治時代に職を失った浮世絵師がインドからの注文を受け、見本を模倣して描いたものだという。日本製のマッチ絵に描かれたインドの神々の姿は、どこか歌舞伎役者を思わせる。ドイツ製の陶器の神像は、色使いが欧風趣味である。こうして世界各地で作製されたポピュラー・アートはヒンドゥー教文化の活性化や均質化をもたらし、それがインド独立運動の巨大なうねりにまでつながってゆく。列強の足元で作られた商品がそれを生み出した世界秩序を覆すような動きをも誘発していったのである。当時の文化と政治の関係を、展示を通じて浮き彫りにするのもこの企画展のねらいのひとつである。コレクターご本人によるギャラリー・トークなど関連企画も計画している。芸術の秋にインドのアートの世界を満喫して頂ければ幸いである。

ヒンドゥー教徒の婚姻儀礼の始めに、災厄を払う神ガネーシャを招来する。聖化するための油を神像に直接かける（インド・ラージャスターン州ラダナ村、1990年11月）

街角のポスター屋。この店は神像専門で、軒先にまで商品を並べて売っている（インド・ラージャスターン州ウダイプル市、2010年10月）

ドイツで製作されたヒンドゥー神像。クリシュナ神がライオンに乗る女神に抱かれている。神々の組み合わせが風変りである。20世紀初頭のものか（ジョティンドラ・ジャイン氏およびジュッタ・ジャイン氏共同所蔵）

《企画展》
インド　ポピュラー・アートの世界
――近代西欧との出会いと展開
会期：２０１１年9月22日（木）～ 11月29日（火）
会場：企画展示場Ａ

散策と思索の径

コロンビアの短い旅

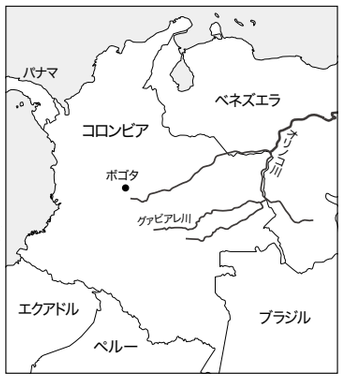
大貫良夫（おおぬき よしお）
野外民族博物館リトルワールド館長

一九六九年の二月から三月にかけてのことである。今や故人となった文化人類学の同学の友枝啓泰（ともえだひろやす）と二人で、コロンビアから南米各国をまわる旅行をした。もちろんそれなりの学問的目的と使命のある旅行であったが、そのことは省略。本稿ではコロンビアを回想する。

ライヘル＝ドルマトフ夫妻と友枝啓泰（民博名誉教授）

炎天下のグァビアレ川を行くカヌー

入植者の話を聞く県知事たち



黄金が眠る墓

コロンビアの首都のボゴタでは黄金博物館を訪問した。当時で万を超える数の先スペイン期黄金製品を集めているとして、名を馳（は）せていた博物館である。文化人類学者のヘラルド・ライヘル＝ドルマトフ博士と夫人のアリシア・ドウッサン博士に連れられて館長に面会し、なかを案内してもらった。

導入展示部門を過ぎると真っ暗な部屋に入る。やがてぼうっと灯（あか）りがつき、それが次第に明るくなると、闇のなかからゆっくりと数々の黄金細工が浮かび上がり、電灯がすべてともった途端に、部屋の四方、床近くから天井までの黄金が一斉に輝き出す。この仕掛けに、初めてのときは驚いておもわず感嘆の声が出てしまった。

得意満面の館長の話では、先スペイン期の墓地が盗掘にあい、貴重な遺物が海外に流出するので、国内に遺物をとどめておくには盗掘品を国が買い上げるしかない。これによって、黄金細工が黄金博物館で集中的に保存できるようになったとのことである。

しかし、それは良かったと手放しで喜ぶわけにはいかない。その政策がかえって盗掘をあおってしまい、コロンビア各地の農民をはじめとする住民によって、墓地という墓地はあらかた掘り尽くされてしまったのである。学術的な発掘などしている暇はない。

もっと恐ろしいこともある。研究者が発掘していて黄金のかけらでも見つけようものなら、あっというまにあたり一面が乱掘の場に変わる。武器をもつ住民も少なくないので、阻止でもしようものなら研究者の生命が危険にさらされるそうである。後年、ペルーのクントゥル・ワシ遺跡で黄金細工を含む墓をいくつも発掘する立場になったとき、このときの話を思い出し、ペルーにいることの幸運をかみしめたものであった。

ボゴタの黄金博物館の展示品

先住民のわびしい集落

ボゴタでの用事をすませてから、わたしたちはアンデスの東斜面を下って、ひたすら平坦なサバンナ地帯に入り、オリノコ支流のグァビアレ川を下るカヌー旅行をした。この地方の県知事の視察に同行が許されたのである。

一五人ほどが大きなくりぬきカヌーに乗り込み、往復一〇日ほどの旅となった。夕方近くなると砂州や開拓農民の軒先を借りて、各自がハンモックと蚊帳を張って寝る。食事は大鍋でバナナと川でとれた大きな魚の干物を煮込んだものを朝晩に食べ、昼はどこかの家でキャッサバの焼きパンをわけてもらう。

アンデス山地の方から個々に入植して間もない農民が、グァビアレ川沿いに点々と家を建てて住む。それらのあいだに小さな集落があり、先住民が住む。本などには名前も出てこない弱小化した民族で、消滅寸前である。川近くの森を焼いて畑とし、川魚やときに小さなワニなどを捕まえて食料にする。

入植者の生活に目を向けると、家屋もキャッサバの調理法も魚のとり方も先住民と同じである。調理具などは結局先住民から購入せざるをえない。先住民を征服した側の世界に属しながら生存のための技術は先住民と同じになる。しかしその土地に根ざす文化はもたず、出自についての共通感覚もない。核家族か拡大家族程度の集団しかない。一方、先住民社会も崩壊しつつある。学校やキリスト教宣教になじむ選択をすれば入植者と変わらぬ社会になる。

一九六九年のオリノコ上流のサバンナの住民に見えたのは文化の崩壊であり、社会集団の解体といった姿であった。その後、コロンビアの熱帯低地は、反政府ゲリラ、麻薬生産者のテロリズム、政府側の制圧軍事行動など、暴力の舞台になった。四〇年を経た今日、先住民と入植者たちはどうなっているのであろう。カヌーで短い旅をともにした船長、県知事、警官、医者、カトリックの神父たちの運命は。無表情でわれわれに応対したあのわびしい集落の先住民たちも、その後はどうなったのであろう。できることなら再訪してみたい。

先住民の村

ワニの皮をはぐ先住民の女性

多文化をささえる人びと

逆説的な存在と活動
カパティラン

カパティランとはタガログ語で「兄弟姉妹」の意味をもち、
社会でその活動の必要性がまったくなくなることが望まれて生まれた。
フィリピン人を中心として1988年に東京で生まれた外国人住民・移住者への支援団体である。

鈴木 伸枝（すずき のぶえ）
千葉大学 教授

カパティランの移住者支援は、「旅人をもてなす」というキリスト教の配慮や共感の精神をその理念とする。ただし、ひとつの宗派やキリスト教義に固執せず、宗派を超えた姿勢で活動をおこなっている。在日フィリピン人の支援団体は、一般に日本人またはフィリピン人の一方で構成し、必要に応じてお互いが協力するという形が多いが、カパティランは、日本人とフィリピン人が常に協働している数少ない団体のひとつである。実際、フィリピン人と日本人がチームで働き、被支援者の自立を目指すことが団体の目的でもある。そして、この目的が、本文のタイトルともなった団体の逆説的な誕生に繋（つな）がっている。

活動のはじまり

八〇年代は、エンターテイナーとしてナイトクラブで働いたり、日本人男性の配偶者として過疎地に移住してきたフィリピン人女性が直面する問題が広くメディアでとり上げられた時期である。当時日本聖公会フィリピン小委員会の委員長だった神崎雄二司祭と、一九九〇年に聖公会の招きで来日したフィリピン人スタッフが、知人もなく相談する先もわからないなかで、職場での契約不履行や性的・肉体的・精神的暴力、コミュニケーションの問題などに悩む女性たちの家を訪ねて相談にのりはじめた。英語とタガログ語でのミサや、タガログ語・英語・日本語の電話相談も続けて開始した。こうした活動は、やがて日本人ボランティアや他の宗教や労働関係の支援組織、フィリピン大使館、在フィリピンの移住者支援組織との連携、そしてフィリピン以外の国の移住者支援組織との協調関係を強化しながら拡大していった。

移住から定住へ

八〇年代後半には、クラブで働くフィリピン女性たちと日本人男性との結婚が増加し始め、これに伴い九〇年代からは相談の内容も定住にかかわる問題へと変化していった。ビザ取得や変更、ドメスティック・バイオレンスや姻戚関係、離婚、出産、子どもの教育やいじめと多岐にわたるようになる。また、日本人の夫の過失や、フィリピンの家族からの過度な経済支援要求などから離婚したような場合、女性たちはその後、別の男性に精神的・経済的に頼ろうとしたり、はたまた酒や薬物に依存するといった問題があらたに浮上した。

こうしたなか、素人相談員では十分な対応ができないため、カパティランではフィリピン人スタッフをプロのカウンセラーとして養成するために研修を受けるシステムを作りはじめた。現在のプログラム・ディレクターもこうしたトレーニングを受けた支援歴一三年のベテランで、他のカウンセラーや日本人スタッフとともに、変わりゆく移民の現実に常に向き合いながら、日々問題にとり組んでいる。

定住から家族呼び寄せへ

現理事長の笹森田鶴司（ささもりたづる）祭やスタッフによると、ここ数年は、子どもの問題が増加しているそうだ。日本人とのあいだに生まれた日本育ちの子どものほかに、二〇〇八年の国籍法改正前後から、フィリピンから来日してくる子どもの数が上昇している。日本人とのあいだに生まれながら、さまざまな事情でフィリピンで育った子どもが来日したり、母親が来日以前のフィリピン人のパートナーとのあいだに生まれた子どもを呼び寄せるケースである。家族が一緒になれたことを喜び、日本語を学びながら精一杯生きる若者がいる一方で、学校でのいじめや、経済的な事情から勉強を続けられずに職に就き、やがてさまざまな社会悪に染まっていく若者が増えている、とスタッフは心配する。また、長いこと離れ離れで暮らしていた一〇代の若者とあらたに親子関係を築く戸惑いから対応に苦慮している親も多いという。しかし、問題がもち込まれた場合でも、カウンセラーたちは、情報をえたうえでの決断が重要とし、アドバイスや情報は提供するけれども、あとは本人たちの判断で行動するよう促しているそうだ。自己の判断力や自立心を養うことで、先に述べた依存という負の連鎖も阻止しようとしているのである。

こうした一連のカウンセリングや文化交流のほかに、カパティランがおこなっているイベントに、タラカヤン（話し合い、議論）がある。参加者は、日比の夫婦、日本人スタッフや一般参加者など多様だ。スタッフは、このイベントをとおし、移住者の自己啓発をはかり、親子や移住者同士、そして日本人を含む他の人びととのつながりをつくることで、互いの文化への寛容な姿勢が育めるのでは、と期待している。

支援の必要ない明日を目指して

カパティランは、今年から組織を再編成し、広報や運営資金確保など支援の新体制の構築を開始した。支援団体の広報は、読者の同情に訴える事例をニュースレターで紹介することが多いが、カパティランでは、被支援者は自立できる主体であり「かわいそうな人たち」ではないとの考えから、そうした方法に訴えることなく、あらたな一歩を踏み出している。それは、問題が複雑で多様化するなかにおいても、移住者自身が問題解決できる力を養い、日本人と日常的に協働できる社会ができる、つまり、カパティランの支援を必要としない日を目指しての一歩でもある。

カパティランは東京弁護士会で人権賞を受賞した（2003年）

フィリピンのゲーム、バビティンで遊ぶ子どもたち

台湾・香港・韓国在住の結婚移住者および支援者との合同ワークショップで発表するカパティランスタッフ(中央)

フィエスタの様子

CALENDAR 九月 第42回

歳時世相篇

大震災後の秋祭りの行方

神仏に祈りをささげ、万物への感謝をあらわすと同時に、時空間と知識を共有し地域固有の帰属意識をはぐくんできた村祭り。担い手の継続が難しい現代においても、危機的局面に際したとき、人は地域とのつながりや再生する活力を祭りに求める。そんな祭りの秘めた力を東北で再確認する機会をえた。

池谷（いけや） 和信（かずのぶ）
民博 民族社会研究部

想像をこえる出来事

わが国の農山漁村に暮らす人びとにとって、九月から一〇月にかけての秋は村祭りの季節である。笛や太鼓の音が響き、屋台が出てみこしが村のなかをかけまわる。近年では、村の高齢化がすすみ祭りの担い手がすくなくなったとはいえ、これらの祭りが簡単に消えることはないであろう。

ところが、二〇一一年三月一一日の大地震とそれにともなう大津波によって、東北地方の太平洋岸の村や町の人びとにとっては想定外のことが起きてしまった。津波によって祭りに使う太鼓や笛や衣装などが流されただけではなく、担い手の暮らす家屋や担い手自身までもが流されたところもあるのだ。

わたしの知り合いが暮らす岩手県の三陸沿岸に位置する大槌町（おおつちちょう）においても、事情は変わらない。この町は、大震災によって海岸に近い市街地域を中心に壊滅的な被害を受けたことで知られる。震災前には、毎年、九月下旬に二日かけておこなわれる「大槌祭り」が最大のイベントであった。この祭りは町内にある大槌稲荷神社と小槌（こづち）神社が中心となって商工会議所もかかわり、鹿子踊（ししおど）りをはじめとして、虎舞や大神楽などの町内の伝統芸能が連なる。そのなかには、みこしをかついで川を渡る行事も含まれている。

祭りの力

わたしは、震災後の四月下旬からこれまでの間、数回にわたりこの町を訪ねる機会があったが、今年の九月に大槌祭りが果たしてできるものかどうかが気になっていた。当初、被災者への食べ物、寝場所、衣服など、最低限の生活を確保することが最優先とされて、祭りなどを催すような雰囲気ではなかった。しかし、震災から五〇日後の五月一日、町内のある避難所の庭先で、大槌祭りの際にも欠かせない鹿子踊りが復興の象徴としておこなわれた。この町では、伝統的に海岸部では虎舞、内陸部では鹿子踊りというように民俗芸能が盛んであり、現在では海岸部の子どもたちや若者たちも鹿子踊りに参加するようになっていた。その避難所は内陸部に位置することで津波の影響が少なかった点でより多くの被災者を受け入れることができ、東京からやってきたボランティアの協力もあって今回のイベントに至ったのである。

町の復興が祈願される鹿子踊り

踊りは、午前一〇時の始まりを予定していたが、当初はおよそ一〇〇人の参加者のなかで二〇人以上は、カメラをかかえるメディア関係者であった。避難所に暮らす若者が口にした、「誰のための鹿子踊りなのか」ということばが印象に残ったほどだ。わたしも、まだ時期尚早なのではないか、被災者にはこの場まで来る余裕はないのかと不安がよぎった。ようやく一一時ごろになって、鹿子の面をつけた者一五名、笛をもった者一五名、それに太鼓をかかえた者五名の総勢三五名の一行があらわれた。なかには、面をつけた四～五歳の子どももいる。

踊りの時間は四〇分以上続いたが、力強く踊る姿に人びとは圧倒され、それにあわせた笛や太鼓の音色に酔い、会場全体がひとつになる思いであった。あたりをみると、観衆は二〇〇人をこえていた。

それからおよそ二カ月後の七月のある日、例年九月におこなわれる大槌祭りの開催の可能性について小槌神社の宮司さんにわたしは聞いてみた。みこしをかつぐ人びとが身につける一〇〇着の衣装はすべて津波で流されたが、みこしが保管されている小屋は浸水していないという。例年のようにみこしをかついで川のなかにまで入ることはできないけれど、何とか衣装をそろえて神社の付近でもまわりたいというのだ。祭りに対する意気込みが伝わってきた。

人と人の心をつなぐ

わたしはその後、幾度か被災後の鹿子踊りを見る機会に恵まれて、民俗芸能にはさまざまな人びとの心をつなぐ力があると確信するに至った。舞を見ていた老人や舞を演じる若者など地元の人たち、それに加えてボランティアやメディアの方の気持ちが一体になれる場であるのだ。このことからすると、町外に暮らす若者ももどってくるほど魅力的であるという九月の大槌祭りを期待する声も大きいかもしれない。現時点では、今年の九月下旬に祭りがおこなわれるのか否かは定かではないが、先頭を切って踊る鹿子たちを見れる日が近いことを祈りたい。

フィールドで考える

贈り物から商品へ

——台湾パイワン族・ルカイ族のアワ食品と小米粽、祈納福

林麗英（リン レイエイ）
総合研究大学院大学博士後期課程

儀礼にかかせない贈り物

かつて、アワは台湾では「原住民族」とよばれる先住民族の農耕生活において重要な役割を担っていた。今はコメ、ムギ類を原料とする食品が中心になっているにもかかわらず、台湾の東部・南部に居住しているパイワン族・ルカイ族社会ではアワ栽培が引き継がれている。特に、モチアワで作られるアヴァイ（パイワン族）、アバイ（ルカイ族）、チナヴ（パイワン族、ルカイ族）といったモチ類食品は生活儀礼に欠かせない贈り物である。たとえばパイワン族の収穫祭マサルト、ルカイ族では結婚が決まった女性が以前につきあいのあった男性とのけじめをつけるための儀式キャバダドゥビ、結婚式などの習俗にアヴァイ、またはアバイが欠かせない。また、パイワン族とルカイ族は首長制社会であるため、贈り物としてのアワ食品の形と分量も送り先の地位、身分あるいは用途によって変わってくるという。

かたちはさまざま

アヴァイの作り方は、民族や地域によって異なっている。そのなかでもよく知られているのは、モチアワで練りこんだ生地を平らにのばし、真んなかに塩を混ぜこんだ豚肉（必ずバラの部分）を入れ、ルリホウズキの葉、オオバギの葉（ルリホウズキの葉がないときによってはタケノコ、ヘチマ、カタツムリなどを入れ、塩、トウガラシを加え、ルリホウズキの葉、ゲットウの茎葉、またはサトウキビの葉（ゲットウの葉の代用）で包んで炊いたりするものである。パイワン族・ルカイ族社会の生活スタイル、食生活の変化などの影響を受け、大きさと具は多様である。

ルカイ族のアバイ

薪火でチナヴを炊く

似て非なるもの

他方で、近年は台湾原住民族に関する「文化産業政策」の推進の影響により、モチアワの商品化が著しくなり、アヴァイやチナヴに類似した食品が作られ始めている。これらの食品には「祈納福」、「奇拿富」などという漢字の商品名がつけられ、「小米粽」の名前で消費者に認識されている場合もよくある。また、公的に出版されているパイワン語テキストには、製粉したモチアワで作られたアヴァイは小米糕、モチアワの穀粒で作られたチナヴは小米粽と訳されている。

パイワン族のチナヴ

筆者は二〇〇八年七月より、台湾東部の台東県太麻里郷のある村で調査をしている。その村では、非原住民族の漢人が人口全体の七〇パーセントともっとも多く、そのなかにアミ族、パイワン族が混住しているため、人びとの交流は中国語の会話をとおしておこなわれることが多い。村のアワ商品販売センターを訪問した際、はじめてセンターの商品リストに祈納福を見かけた。翌二〇〇九年には、そこのスタッフから台東地区でおこなわれたアバイ料理コンテストで作られた祈納福が優勝したときの賞状を見せてもらった。

しかし、筆者がパイワン族・ルカイ族社会で見聞きし、食したアワ食品とこうした粽（ちまき）とのあいだにはまったく異なる文化的背景があることに気づき、なぜアヴァイ、チナヴを「粽」と解釈しているのかについて考え始めた。辞書によれば、「粽とは、もともと中国大陸から伝わったもので、五月五日の端午節に粽を食べる習慣がある」としている。センターのスタッフによれば、「モチアワはモチコメと同じくねばねばするし、植物の葉で包んで炊いたりするから漢人の粽によく似ていて、小米粽という名のほうが客に受け入れられやすい」、「祈納福は漢字の当て字で、幸せを願うイメージがあるからではないか」と解釈していた。このように原住民族の商品をより多くの消費者に受け入れられやすくするために、主流社会のことばもしくは用途に置き換えることは珍しいことではないかもしれない。

収穫したアワを天日干し

贈り物として認識されてきた原住民族のモチアワ食品と、商品として販売されている小米粽、祈納福とのあいだにあるものは、ことばの差異だけではない。そこには民族間の主従関係が見え隠れするのである。今日、小米粽、祈納福が消費者に受け入れられていく際、アヴァイ、アバイ、チナヴに育まれた贈り物としての意義が見失われつつあると感じている。

9月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

4日（日曜日）
時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：菅瀬晶子（国立民族学博物館　助教）
話題：パレスチナ刺繍と女性たち
場所：西アジア展示場

11日（日曜日）
時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：関本照夫（国立民族学博物館　特任教授）
話題：影絵人形芝居ワヤン・クリットのこと
場所：東南アジア展示場

18日（日曜日）
時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：太田心平（国立民族学博物館　助教）
話題：韓国系移民はどうして多いのか？
場所：朝鮮半島の文化展示場

25日（日曜日）
時間：13 時から 14 時
話者：内藤直樹（国立民族学博物館　機関研究員）
話題：アフリカのケータイ最新事情
場所：アフリカ展示場

編集後記

今月号の特集テーマは10月6日から本館で開催される特別展「千島・樺太・北海道　アイヌのくらし――ドイツコレクションを中心に」を少し先どりするかたちになった。特別展にかかわった研究者が執筆する本特集が展示観賞の参考になれば幸いである。ところで今日、いわゆるアイヌ新法（1997年）に見られるように、アイヌは国家によって民族として認められ、文化や言語の振興が図られているが、民博とのかかわりはずっと長い。民博は1977年の開館当初からアイヌ文化を日本の固有文化のひとつとして重視し、常設展のアイヌ展示はアイヌの人びとの協力で実現したものである。また「アイヌモシリ――民族文様から見たアイヌの世界」（1993年）、「ラッコとガラス玉――北太平洋の先住民交易」（2001年）、「研究者が見誤った伝統？アイヌの機織り技術」（2004年）、「アイヌからのメッセージ――ものづくりと心」（2004年）など特別展、企画展でもアイヌ文化をとりあげてきた。本特集を契機にそれらを振り返ってみたいと思う。（庄司博史）

●表紙：同じ用途をもつ生活用具にも、その形や彫り込まれた文様に地域の特徴があらわれる。
上から・「ニポン」／盆　千島アイヌ　K0002368
・ニーソシ、チェペニパポ／皿　樺太アイヌ　H0023793
・イタ／盆　北海道アイヌ　K0002158

次号の予告

特集
保存食（仮）

月刊みんぱく　2011 年 9 月号
第 35 巻第 9 号通巻第 408 号　2011 年 9 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

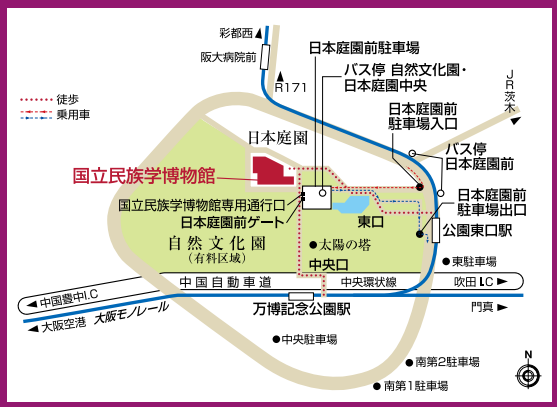
発行人　八杉佳穂
編集委員　庄司博史（編集長）　樫永真佐夫　川口幸也
久保正敏　菅瀬晶子　中牧弘允　山中由里子
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/